様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2023
課題番号：１７Ｋ１３５３４

研究課題名（和文）15～17世紀における日本の海外貿易と国内経済との連関の研究

研究課題名（英文）Research on the connections between foreign trade and domestic economy in 15-17th century Japan

研究代表者
ＯＬＡＨ　Ｃｓａｂａ（Olah, Csaba）

国際基督教大学・教養学部・上級准教授

研究者番号：７０６４６３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世日本の海外貿易の実態を「国内経済との連関」という切り口で解明することを目的とし、モノ（輸入・輸出品）の流通・消費・調達と商業環境を解明し、海外貿易に携わる人と組織及びその活動の実態究明を行い、輸入品の国内流通・消費の再検討とともに、日本人の中国における商業活動についても実証した。それにより、これまで漠然としたイメージしかなかった中世日本の対外貿易と国内経済との連関、つまり中世日本海外貿易の経済基盤について明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究では、中世日本の海外貿易とその背後にある国内の経済基盤の実態を系統的に究明することがなく、海外貿易と国内経済の研究が平行線をたどってきたが、本研究は、海外貿易の国内経済基盤に着目し、海外貿易の背後にある経済環境をより立体的に把握し、実証研究と理論構築に基づいて、これまでに個別に議論が行われてきた海外貿易史研究と中世経済史研究分野の共通の議論に向けて新たな問題提起と理論を提示することも学術的意義といえる。教育現場において、中世日本の歴史を語る際、海外と国内の視点から同時に検討するということに、本研究がつながることが社会的意義として期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to examine the situation of foreign trade in medieval Japan from the perspective of its relationship with the domestic economy. I investigated the actors and institutions involved in trade with China, their activities, re-examined the domestic distribution and consumption of imported goods in which they were involved, and also tried to demonstrate the involvement of Japanese people in commercial activities in China. As a result, the relationship between medieval Japan's foreign trade and its domestic economy, which was generally researched separately for a long time, and we possessed only a vague image of it, has been revealed as a complex entity, and thus we could reconstruct the elements of the economic basis of medieval Japan's overseas trade.

研究分野：日本対外関係史

キーワード：入明記　唐物　遣明船貿易

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

これまで研究代表者は、15～16 世紀の東アジアの対外交流に対する理解を深めるべく、明代中国の外交および対外貿易制度、日本遣明使節の中国における貿易活動を中心に研究を行ってきた。また、日本遣明使節の活動を他国の遣明使節の活動と比較し、明の対外貿易体制というコンテキストから包括的に検討した。この過程においては、先行研究で十分議論が深められていない課題も浮き彫りになった。それは、日本国内の経済（商業・流通）が海外貿易とどのようにつながっていたのかという課題である。具体的には、朝貢品や貿易品、明での貿易活動に必要な資本がどのように調達され、中国からの輸入品がどのように日本国内の流通循環に入り、消費されたのかという問題である。そしてこの課題に取り組むには、日本の海外貿易とその背後にある日本国内の経済基盤の実態を系統的に究明することが不可欠であると痛感した。

本研究の中心となる「日本海外貿易の国内経済的基盤の究明」に関しては、佐々木銀弥が 1970 年の論文（1994 年の著書に再収録）ですでにその必要性を指摘している。佐々木は、海外貿易と国内経済の研究が「平行線をたどってきた」が、「このような現状は、海外交渉・国内政治経済、さらには東アジア全体の歴史像の正しい把握と位置づけのためにも、なんとしても克服さるべき」であるとして、海外貿易史研究と経済史研究による総合的な実態究明を提唱した。しかし、この指摘以降の研究傾向を概観すると、この問題意識はほぼ継承されることなく、こうした視点からの研究が進められてこなかった。

例えば日明関係史研究の場合、日明貿易を国内経済との関連から考察した研究はなく、2015 年に上梓された『日明関係史研究入門』を見ても、やはりこの観点からの研究に関しては、現段階での限界が示されている。一方、本研究課題にとって示唆に富むものとして、京都における唐物の消費について検討した関周一の『中世の唐物と伝来技術』がある。唐物は海外貿易と国内経済との連関を考える上で貴重な題材であり、関の唐物研究は方法論の点でも魅力的である。ただし、関も述べる通り、その需要や消費を品目に即して考察するのは今後の課題として残されている。また佐々木銀弥は、唐糸輸入と関連して、対明貿易に携わった堺商人に対する大徳寺の金銭貸借という事例を取り上げた。海外貿易のための資金調達への寺社のかかわりという論点及び佐々木の方法論は、本研究の着想に刺激を与えたものであり、今後は類似の事例を分析し、海外貿易と地域経済との関連性について議論を深める必要があると考えた。

加えて近年、岡本真が日比屋氏という商人一族の日明貿易及び対欧貿易への関与を取り上げ、以前から海外貿易に従事していた日本商人がヨーロッパ勢力の進出をきっかけにヨーロッパ人とも貿易をすることになったという、海外貿易に従事した商人の対明貿易から対欧貿易への連続性を指摘した。日本史料と欧文史料を併用し説得的な見解を導いている点でも、今後の研究に影響を与える成果である。

この他には、田中健夫による遣明船投資に関する研究、橋本雄による遣明船の経営構造と唐物消費に関する研究、倭寇と日本との密貿易に関する佐久間重男の研究、二田村洋幸の中世日朝貿易と九州地域に関する研究などがある。さらに大友氏と唐人との交流を取り上げた鹿毛敏夫、中世長崎・松浦氏とヨーロッパ人との貿易に着目した外山幹夫の研究がある。対外関係史と地域史を結ぶ視点から進められている鹿毛や外山の研究は、国内経済との接点を究明し、国内の商業・流通史の枠で捉えなおすことによって、発展する余地が大きいと考えた。また、経済史分野においては、豊田武・三浦圭一・早島大祐・井原今朝男による対外貿易と中世日本経済との関係を指摘する研究もあげられる。

これらの研究で取り上げられている事例は未だ網羅的ではなく、検討課題も残しているが、海外貿易と国内経済の連関について総合的に把握していく上で、多くの方法論的示唆が含まれている。

２．研究の目的

本研究では、中世日本の対外貿易と国内経済との関連性に焦点を当てて、日本における輸入品の流通・消費と輸出品の調達及び地域経済とのかかわり、海外貿易に携わる人と組織及びその活動の実態を解明し、日本対外貿易の背後にある国内経済環境との関連をより立体的に把握すること、特に日本遣明使節の中国での貿易活動、およびその活動の背後にある中世経済との連関を明らかにすることが主な目的であった。そして、中世

日本の社会経済における海外貿易の意義、あるいは海外貿易と国内経済のかかわりについて、これまで個別に進められてきた海外貿易史研究と経済史研究の双方からアプローチし、知見を深めることを目指してきた。

３．研究の方法

本研究は上記の研究目的に従って史料や参考文献の調査と収集、収集した史料の分析と考察、研究成果の発表・公開を並行して行った。文献史学及び比較史学といった歴史学の研究方法に基づき、関連史料から本課題と関わる事例を集め、そのデータを基に考察・分析を行った。収集・分析の対象としたのは、寺社や貴族の記録・日記、地方史、武家文書などを含む日本史料、筆記や実録、地方志などを含む中国史料である。史料から抽出した事例を、本研究のなかで取り上げてきた論点に沿って分析と整理をし、これらの論点を先行研究と照合した。史料収集の際、2021 年に公開された「中世日本　東アジア交流史関係史料データベース」（科学研究費補助金・基盤研究（B)「中世日本の東アジア交流史に関する史料の集成的研究と研究資源化」【研究代表者：国立歴史民俗博物館 荒木和憲】および国立歴史民俗博物館「総合資料学の創成と日本歴史資料の共同利用基盤構築」事業の成果として作成したもの）を使用し、史料の収集・確認を効率よく行うことができた。

４．研究成果

本研究では、中世日本の海外貿易の実態を「国内経済との連関」という切り口で解明することを目的とし、モノ（輸入・輸出品）の流通・消費・調達と商業環境の解明、海外貿易に携わる人と組織及びその活動の実態究明を行い、輸入品の国内流通・消費の再検討とともに、日本人の中国における商業活動についても実証した。

貴族や寺社の日記の分析を通じて中世社会における唐物流通、唐物輸入・消費と商業ネットワークについて検討した際に、特に唐物の財産としての要素に注目し、国内での入手経路や売却、質入、贈与に関する事例から唐物流通の一端を解明した。そこで、困窮を理由に唐物を売却・質入したり、あるいは経済的余裕があって唐物を収集したりする禅僧や武士の存在が浮かび上がった。室町将軍や貴族による唐物入手、唐物贈与の事例から、唐物流通とのかかわりについて明らかにした。これらの論点は、これまでの中世首都経済論や贈答・贈与論に関する新しい知見を深めることにつながると確信している。

禅僧の目利きとしての存在は、遣明船貿易の研究においてすでに指摘されているが、彼らは国内における唐物流通にも目利きとしてかかわっていることが明らかになった。つまり、禅僧が遣明船経営者の目利きとして起用された背景には、禅僧の唐物に対する知識、あるいは禅僧の国内における唐物流通への関与など、その影響が再確認できた。

唐物の入手に関しては、以前に伝来されたものなのか、遣明船貿易による輸入品なのか、その区別は難しいが、遣明船が帰国してから使節メンバーが唐物贈与を行う事例から、帰国後の遣明船に対する期待が、畿内だけではなく、九州でもどれだけ高かったかがうかがえる。例えば、遣明船帰国後に、乗船者が寺院や貴族を訪れて唐物贈与を行ったり、禅僧や貴族がこれらの唐物をさらに他人に贈与したりして、このように遣明船から下ろされた唐物の輸入品が徐々に畿内やその他の地域に出回るようになったという唐物流通経路の一つが確認できた。

美術史分野における唐物研究から知見を得て、中世における美術品としての唐物の価値や、価格の判断基準について知識を深め、唐物消費の実態を様々な角度から把握することができた。

豊田武の指摘を受けて、輸入品の場合は京都を中心とする首都圏のみならず、首都周辺の地域への流通の検証も視野に入れたが、京都までの流通ルートやそれに伴う商業活動、輸入品の流通と配分の地域性に関しては今後さらなる史料事例の蓄積と分析が必要である。

もう一つの視点として、遣明船貿易を支えてきた商人や寺社、土倉（金融業者）など、海外貿易に従事したアクターの参加形態（資本提供・取引依頼・貿易活動など)、および彼らの海外貿易活動とその背後にある国内経済との接点を検討した。遣明船の投資環境、輸出品の用意に必要な環境やネットワーク、遣明船貿易の人的基盤や資金・経営の問題について実証した。これに関しては、帰国後の積載貨物の荷降ろし作業の事例につ

いて再検討を行った結果、遣明船への資金提供のありかたや帰朝後の抽分銭の処理について新しい見解を示すことができると考えられる。遣明船貿易の国内流通経済とのつながりを、まだ不十分な点を承知しつつも、ある程度見出すことができた。

以上の研究に関する一部の成果として、これまでにも共同で研究を行ってきた隣接分野の研究者を招待し、「Asian Studies Conference Japan」という国際学会でパネルを企画した。本研究課題の中心となる唐物の流通・消費について考察し、唐物の品質判断の難しさや、遣明船経営者の荘園ネットワークと資金調達方法について検討し、対外関係史と経済史の接点となる論点を示した。また、EAJS（ヨーロッパ日本研究協会）の国際学会では、遣明船貿易および唐物消費・輸入と室町時代の国内経済というテーマで二回報告を行った。遣明船貿易に必要な朝貢品の調達とその背後のネットワークというテーマで、「Foreign trade and domestic networks - A few remarks on the organisation of tributary embassies to China in the Muromachi period」というタイトルで英語で論文を執筆し、2024 年度の秋に出版予定である。ここでは資金提供モデルの変化にも言及したが、詳細は今後出版予定の単著で紹介する。

さらに、本研究のもう一つの切り口として、遣明船貿易による唐物入手の実態について検討した。入明記という旅行記録の事例から、中国滞在中の唐物の入手経路や購入価格、購入のための資金調達などについて明らかにした。さらに、日本商品に対して明朝が支給する買取価格（給価）をめぐる寧波・南京・杭州での折衝の流れを再現し、給価およびその後の中国での貿易活動との関連性について考察した。また、華人との私貿易の時に起きた納品滞納の事件について分析し、その事件について新事実が明らかになった。ついでに、遣明使節メンバーが中国滞在中に交流する華人の相手について中国史料から特定し、日本人の中国での動きについて新事実の発掘ができた。

これに関連して、ヨーロッパ人の東アジア来航や密貿易商人集団の台頭が広東・浙江沿海の交易環境および従来の朝貢体制に与えた影響について主に明側の史料を分析した。江南都市の商業・流通や牙行の仲介業、浙江・広東沿岸での密貿易について検討し、明代における経済環境についてもできるだけ理解を深めた。そこで、16 世紀の日中貿易を倭寇問題やヨーロッパ進出というより広い文脈で捉えなおし、中国辺境地における密貿易と朝貢貿易の実態を総合的に検討した。とりわけ、①互市という交易形態の実態、②互市の拡大と辺境地の影響、③互市体制への転換と官収買の消滅、といった課題に取り組み、「朝貢から互市へ」の転換の一端を究明した。

これらの研究成果として、東方学会の平成２９年度秋季学術大会のシンポジウムで発表を行ったほか、ボン大学、上海大学、デュースブルク-エッセン大学で開催された国際学会で報告した。「Legal private Trade within the Framework of the Ming Tribute System」というタイトルで論文を執筆し、明の朝貢・対外貿易制度における遣明使節の貿易活動の位置づけ、互市体制の実態について実証した。デュースブルク-エッセン大学（Universitaet Duisburg-Essen）で日明貿易における商行為と折衝を取り上げ、この報告をもとに現在論文を執筆しており、デュースブルク-エッセン大学のプロジェクト「Cultures of Compromise」の編著のなかに発表する予定である。

この他には、本研究期間中に「日明朝貢貿易の実態」という題名で論文を執筆し、『新・日中文化交流史叢書・明代巻』（陳小法・橋本雄編）のなかで刊行予定になっているが、出版が遅れているため、未刊行である。コロナ禍で大学での仕事が忙しくなり、それに子どもの誕生が加わったため、すべての研究成果を予定していた通り発表できなかった。今後、未発表の成果は、雑誌・紀要の論文および単著のなかで公開する予定で、脱稿に向けて邁進している。

海外の日本中世史研究者は、唐物文化に対する関心は高いが、対外関係史や遣明使節に関する研究の蓄積がまだかなり浅いため、本研究成果の英語による発信がこの分野の海外における発展につながることに期待したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Olah Csaba	４．巻 16:2
２．論文標題 Foreign trade and domestic networks - A few remarks on the organisation of tributary embassies to China in the Muromachi period	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Journal of East Asian Cultures	６．最初と最後の頁 57-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.38144/TKT.2024.2.3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Olah Csaba	４．巻 Volume 15
２．論文標題 On the Inspection of Foreign Products during the Ming Period	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Crossroads	６．最初と最後の頁 49-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Olah Csaba
２．発表標題 Negotiations and Compromises in 15th- and 16th-Century Sino-Japanese Tributary and Trade Relations
３．学会等名 Conference "History and Theory of Compromises"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Olah Csaba
２．発表標題 Chinese commodities and domestic economy in Muromachi Japan
３．学会等名 European Association of Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Olah Csaba
２．発表標題 Sakugen Shuryo's experience of legal and illegal trade in Zhejiang around the 1540s
３．学会等名 European Association of Japanese Studies (EAJS)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 オラー　チャバ
２．発表標題 Continuity and Change in Japanese Trade and Diplomacy during the Transition from the Late-Medieval to the Early Modern Period
３．学会等名 Asian Studies Conference Japan（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 オラー　チャバ
２．発表標題 Legal vs. Illegal Trading Patterns within the Framework of the Ming Tributary System
３．学会等名 Workshop ー”Tribute System and Rulership in Late Imperial China“　（ドイツ・ボン大学）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 オラー　チャバ
２．発表標題 The rising tempo of illegal trade and the changing tribute system ーCoastal Zhejiang around the 1520s-40s
３．学会等名 Maritime Asia海洋亜洲 Conference（中国・上海大学）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Olah Csaba
２．発表標題 Gozan monks and the gathering of domestic and international intelligence in the 15-17th century Japan
３．学会等名 International Association of Buddhist Studies (XVIIIth Congress)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Olah Csaba
２．発表標題 倭寇・仏郎機・「奸貪の徒」と一六世紀の日中関係――「互市体制」論によせて
３．学会等名 平成２９年度秋季学術大会のシンポジウム「明末清初研究の新動向I：接触と交流」（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Olah Csaba	４．発行年 2022年
２．出版社 V&R unipress	５．総ページ数 366
３．書名 ”Legal private Trade within the Framework of the Ming Tribute System”（In: Ralph Kauz・Morris Rossabi (eds.) Tribute System and Rulership in Late Imperial China, pp. 295-315）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関